

書評

山内舜雄著 『続正法眼蔵聞書抄の研究』

池田魯參

本書は「前著『正法眼蔵聞書抄の研究』の続篇である」(一七頁)。同時に、「文字通り筆者の宗学そのものに足を踏み入れた第一の成果でもある」(四頁)。

その叙述の方法は、『聞書抄』の殆んど九〇%以上(の原文)を引用(し)解明している(一七頁)というように、『聞書抄』の原文にそって随次に検討を加えるという形で、問題点を指摘し考察を加えている。

殊に、本書で解明しようとした課題は、序論で示すように、以下の四点であった。

「第一は、鎌倉期における『眼蔵』理解を、『聞書抄』に依ってこころみる」(一一頁)ことである。「いわば、中古天台の主統をなす慧心流から、鎌倉時代の道元禪師へと降りて来たのである。それは全く、江戸宗学を基点として『聞書抄』へと遡及する従来の研究方法とは逆の方向で、ユニークと云えば唯この点だけである」(一二頁)

「第二点は、『聞書』と『抄』とを一体化して見る従来の宗学的見地に対する疑義である」(一三頁)「両注は必ずしも同じ方向をむいていない」(一四頁)からである。

そこで当然のことながら、第三には、『抄』における『聞書』の教寄りの注釈を、いかにして振り切って宗意を闡明化するかのプロセスが、関心の対象となってきた」(一五頁)わけである。

このような視点は、やがて第四に、「十二巻本『正法眼蔵』と『聞書抄』の所依とする七十五巻本との関係追及」(一六頁)へと及ぶはずである。

本書における研究の構図はほぼこのようなものである。著者は「解明の方法」(一一頁)というが、方法というよりはこれらは究明すべき課題とすべきであろう。したがって本書では、一〇三点の課題に焦点をしばり、この点についてはこれ以上のものを望むべくもない詳細な研究成果となった。ただ第四の課題は著者も述懐するように、別に考察するべきものであり、本書の中では印象的見解以上の確たる意見はどこにも認められない。著者のこれからの研究がその辺にまで及ぶという予告なのである。

三点の課題を究明するために、本書は七十五巻の『正法眼蔵』の注釈書である『聞書』『抄』を、一卷二巻を随文解釈の方法によって読み解きつつ、問題点を指摘し、その意味を検討していく。本書においては、七十五巻のなかから、順次、(1)諸悪莫作第三十一、(2)

大修行第六十八、(3) 仏向上第二十六、(4) 行持第十六、(5) 有時第二十、(6) 授記第二十一、(7) 全機第二十二、(8) 都機第二十三、(9) 画餅第二十四、(10) 現成公案第一、(11) 仏性第三、の十一巻をとりあげている。

先ず、第一章に『諸悪莫作』の巻をとりあげたのは、『聞書抄』を書誌学的に精査した河村孝道教授の言に依ると、『聞書抄』の注解作業は『諸悪莫作』の巻から始められたのではないか、という意味が、実際に同巻の『聞書』と『抄』を詳究することによって身を以て看取できた(三頁)ということからその理由の一端が伺われる。「このたびの研究の発点が、ここにあることを理解して頂ければ倅いである。かくして『諸悪莫作』の解明に全力を傾注したわけであるが、つづいてそれは内容的には『大修行』へと繋がってゆくことは容易に想察されよう。このようにして二本の柱が、研究方針が樹つと、あとは『仏向上』『全機』へと向うのは自然の成りゆきで、『行持』『有時』以下、目次の如き進展とはなつたのである(三頁)。

著者の研究の発端が『諸悪莫作』の他の巻の形式とは異なる『聞書』の輻輳した編集法に対する疑義にあつたということであろう。ここから本書の研究が始まつたわけである。

しかし、その研究がなぜ『大修行』に結ばれ、それがなぜ二本の柱になるのか、そして『仏向上』や『行持』へと展開し、『有時』から『画餅』までの一連の巻へと展開するのか、それがなぜ急遽、『現成公案』や『仏性』へともどつたのか、一書の構成において当然明らかにならなければならないだろう、これらの理由については遂に何事も明かされないのである。ただ、「恣意的といわれようが、

これは従来の研究動向からしていたし方のない思索の流れで、筆者としては止めようはない(三頁) というのみである。しかし、読者は、「思索の流れ」の必然と、その秘密を是非聞かせて欲しいと願うだろう。そういう人の情に応えようとならないのは、本書の不親切なところと私は感ずる。

私としては、『諸悪莫作』の考察から始めるなら、『受戒』を柱にする十二巻本では欠けている、七十五巻本の柱ともいふべき、『坐禅儀』や『坐禅箴』の考察を進め、『天台小止観』の帽頭におかれている「七仏通誠偈」の解釈をも含めて、宗意の意義を探ってみたところである。

本書は、従来の『現成公案』や『仏性』を重視する七十五巻本の読み方に敢えて逆らうようにして『諸悪莫作』から始めた研究なのであるから、少なくとも本書の中からは、『現成公案』と『仏性』の二巻は除外する位の見識を示して欲しかったと私は感ずる。まして、『仏性』の巻は、前半の第七段を以て終る(四頁) 未完成稿であればなおのことであろう。『現代公案』と『仏性』を別の一冊にまとめて、改めてこの二巻の『聞書抄』における位置を究明する方が適切ではなかつたらうか。いかにしても『仏性』の一巻を二冊の本に分ける理由はどこにもないように思われる。

したがって本書でとりあげた十一巻の巻々は、特別の理由があつて、七十五巻のなかから順次とりあげ検討を加えていったというようなことはないようである。この外他の諸巻についても、今後継続する研究の中でとりあげるといふ前提に立つて、とりあえず著者の研究生生活の連れ連れに考察の終つた十一巻について、このようない冊としてまとめてみたというのが、偽わらざる本書の成立事情

であろう。

さて、本論の内容についてふれなければならないのであるが、これほどの大冊の、これほどの詳密な考察の一々について、与えられた紙数の中で細大漏らさず紹介することなど最初からできぬ相談といわなければならない。そういう大それたことは考えないようにして、本書を一読して気がついた点を、二、三書き出し、本書に対する私の批評としたい。

まず一点は、『聞書抄』の注釈態度に安易にもたれかかりすぎたのではなからうか、ということである。たとえば、『抄』注が無ければ、到底歯が立たない」（一四一頁）と記し、『眼蔵』本文は、いかにも難解難入である。もし『抄』の、「語話時不聞ナル道理ノ上ニ又語時即聞ナル道理アルヘキ所ヲ如此被述也」の注がなかったならば、途方にくれることは確実である。まことに『抄』は、稀有の釈を遺してくれたものである」（一八四頁）と記す例などは、『聞書抄』に対する本書の一貫した態度である。が、このように無限定のまま全面的に『聞書抄』に寄りそってしまったために、読者には『正法眼蔵』と『聞書抄』の間にある微妙な呼吸の違いがなかなか見えてこないのである。著者自身の『正法眼蔵』本文に対する見解が先ず示され、その次に『聞書抄』の解釈の特色を究明するというようなこの研究に必要な段取りがとられていないからであろう。『正法眼蔵』自身の特質なのか、『聞書抄』において初めて現われる特質なのか、こういう視点を意識的に採用して本書の読者は身構えて読まなければならない。

次に、本書に引用されている九〇%にも及ぶという『聞書抄』の引用文が、句読点を打たないでそのままの形で印刷されている点は

やはり一考を要するであろう。『聞書抄』の原文を著者がどういう呼吸で読んだのか、その跡形を明示することは、読解の仕方や理解の仕方を明らかにすることにもなり、こういう教理構造を解明する研究には不可欠のことと思われる。自分はこの原文をこう読んだという証拠を提示することは、注釈的研究では重要な契機であり、それを放棄することは大切な契機を放棄することにもなりかねない。例えば、「聞云、応ハ仏ノ出世シヨハシマスコト、衆生ノ機ニカナフナリ。シカアレハ衆生ニ機アリ、仏ニ応アルニナツク。今ハシカアラス、衆生作仏作祖ノトキ、ヒコロ所有ノ仏祖ヲ罣礙セス、又衆生ヲヤフラス、ウシナハストライフユヘニ、生仏モトヨリ一ナル応トハイフヘキナリ。タトヘハヨノツネニハ、根境相待シテ見ヲタツト云ヘトモ、今ハシカラサルカ如シ。前後ヨクノヨモヒアハスヘシ」（句読点は私が付けた）という『諸悪莫作』の『聞書』の文も、このように句読点を入れながら読んでみると、次のような解釈は生れようがないように思われる。「やはり、いちおう応身の、三身観に依る一般論を展開する。かかる教的発想を、「今ハシカラス」と否定し去り、生仏一如を高調する。しかし、「生仏モトヨリ一ナル応」身というのでは、三身即一を説く慧心流の仏身観と選ぶことがない。それとは違うとして、「ヨノツネニハ」すなわち世間流行の本覚法門では、「根境相待シテ」教の立場から見を立てるが、「今ハシカラザルガ如シ」と、これを斥う。「前後ヨクノヨモヒ」合せないと、なかなか区別がつかないのである」（五九一六〇頁）というが、前の『聞書』の文を三身観による一般論と解するのは予見的にすぎ明らかに誤読である。ここはいうまでもなく機応相待の論を前提にするので、いうのであれば感応の妙をこそ説くべきところで

あろう。句点を打って原文の呼吸にそって読んでいけば避けられた誤りではなからうか。

次に、典故の押さえ方が甘いように感じられる。例えば「如来ト洞山トノ三十八位ノ祖向上ナル道理」は、なんのことはない、「一切衆生悉有仏性」「三界唯一心」「唯一乘法」「諸法実相」と云うに相違なしというからには、教は天台教学へと繋いで行ったことは明白で、これらの名目はすべて『法華経』に出づるところ、詮慧の教学背景をそのまま露呈しているのは言を俟たない（一七二頁）というような表現があれば、誰れだって首をかしげるだろう。『法華経』の句は後の二句だけで、「一切衆生悉有仏性」は『涅槃経』の、「三界唯一心」は『華嚴経』の句であることは周知のところである。そしてこれらの句は『仏性』の巻、『三界唯心』の巻の独立した課題となったものである。こういう表現が散見するのは本書のために惜しまれる。

この程度の誤記であるなら許されても、例えば『授記』の巻の考察に入っても、『授記』の巻に引用される原文への配慮は全く見られないのである。例えば、『眼蔵』みずからが、「ソレ授記ニ多般アレトモ」と、八種の授記を詳出する。いささか教相寄りの表詮といえよう。しかし授記そのものが法華教学の教語である以上、いかに禅家の立場から取り扱おうとはいえ、如上程度の詳出は避け得ざるところで、許されて可なりというべきであろう（三三一頁）と記し、『聞書』の文にそって八種の授記説を紹介した後で、「すると、五の「近覚遠不覚」から、八の「俱不覚」までが、禅家の拈提とはみるべきである。それは『聞書』の、如上の注をみれば、おのずと分かる。『聞書』は、五から明瞭に宗意を明かす注をだしている。

山内舜雄著『続正法眼蔵聞書抄の研究』（池田）

（中略）『抄』注は、次の如く簡単で、瓔珞経ノ文歟」というのみで、教への接近をはからない（三三二頁）というように記すのであるが、これはほとんど見当違いな解釈といわなければならぬ。ここでも『眼蔵』本文の真意を把握することは、けだし『聞書』の注なくば、全く不可能に近い（三三三頁）というのであるが、私はむしろこういう『聞書抄』への甘い対応の仕方が、ありえないような誤読を生む原因であったように思えてならない。『授記』の巻をどう読むかという課題についてはすでに拙稿「道元の授記思想」（『道元学の揺籃』平成元年十二月・大蔵出版）で究明しているので参照されたい。

以上、いささか本書読後の感想を認め、次々に大部な著書を刊行される著者の人知れぬ御苦労のほどをしのびつつ、美事な次著の刊行を待ち望んでいる一人である。切に御自愛の程を――。

（大蔵出版、平成三年四月十日発行、A5版、本文八一四頁、索引一一頁、二二、六六〇円）